

3年目に入った モンゴルボランティア

～モンゴルボランティアツアーに参加して～



東京ブロック・常議員
門 脇 由 行
(環・水処理本部営業部第1Gr.)

東京ブロックを代表して初参加

東京ブロックから常議員として選出していただいている門脇です。今回、8月11日から19日にかけて実施された第11回アセック・モンゴルボランティアツアーに、東京ブロックを代表して初めて参加をしました。

このボランティアツアーは、神戸市に本拠地をおく民間ボランティア団体のアジア・アフリカ環境協力センター（アセック）の主催によりこれまで10回実施されており、一昨年の第9回ツアーより参加を続けてきたパンテックユニオンからは、今回、播磨ブロックで青年部の副部長をしている東田くん、事務局長の大野さん、そして私の3名が参加しました。

本日は、このツアーに参加し体験してきたことを報告させていただきますので、どうか最後までよろしくをお願いします。

「里親レストラン」オープン！ お客第1号に

パンテックユニオンが発行しているモンゴルボランティア通信でもご紹介していますが、里子たちの自立の場となるように「アセック里親の会」会長の風見幸信氏の寄付によって準備が進められてきた「里親レストラン」が、私たち

の訪れた8月13日にいよいよオープンしました。

ツアー参加者の見守る中、風見会長、ウランバートル赤十字前総裁のネルグイ女史によるテープカットが行われました。当日はモンゴルのテレビ局も取材に訪れ、その様子は、後日、モンゴル全土で放映されたようですが、今回のツアーではテレビがあるような場所には一度も訪れなかったため、残念ながらその映像は見ることはできませんでした。



神戸新聞でも紹介「里親レストラン」(2001年10月2日掲載)



モンゴル風にアレンジした特製カレー
(お皿はホテルオークラ神戸からの寄贈)

その後開店を祝した昼食会が開催され、私たちは第1号のお客として料理をいただきました。レストランは風見会長の名前から「KAZAMI-ENEREL」(風見レストラン)と名付けられ、ボランティアのクック1名の他に、施設で暮らす里子たちが接客係として3名働くことになっています。

このレストランでは神戸のホテルオークラから支援物資として送られた皿が使用されており、この日も子供達の作ったカレーやサラダがきれいに盛り付けられていました。料理はモンゴル料理が中心となりますが、その他に日本から送ったレトルトカレーをモンゴル人向けにアレンジした特製カレーもメニューに加えていくそうです。

商売の素人ばかりによる経営であり、里子たちの接客や料理などが本当に通用するのかなど不安要素もありますが、将来的に里子たちの働く場所が確保されるよう、この「里親レストラン」が繁盛してほしいものと心から願うばかりです。

支援を必要としている 子供たちが600名も

ウランバートル赤十字前総裁のネルグイ女史は、赤十字から離れた後も子供たちへの支援活動を続けており、現在ネルグイ女史が面倒を見ている子供たちは約600名にものぼり、その中に「アセック里親の会」の支援する子供たちが45名含まれています。600名もの子供たちが生

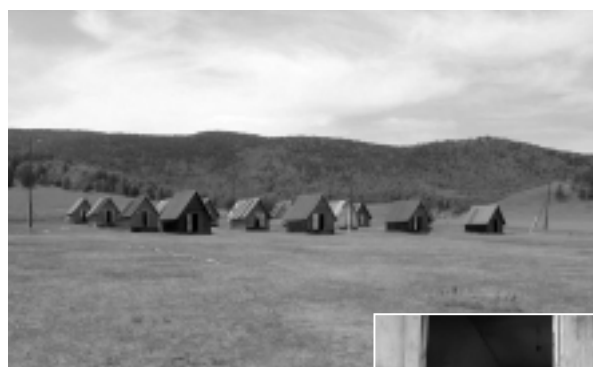
活をしていくためには、アセックだけではなく多くの団体からの支援が必要であり、日本やさまざまな国からの支援を受けながら、子供たちが18歳になるまで生活を保護しています

子供たちは全員、ウランバートル市内や郊外の施設に分かれて収容されており、普段はそれぞれの施設から地域の学校に通っていますが、学校が夏休みの間は郊外のキャンプ場で生活しています。

今回私たちが訪れたのは、このような夏のキャンプ場のひとつで、モンゴル語で「星」を意味する「オド」という国営施設でした。ここには4~5名が寝起きできるバンガロー風の宿舍が30戸ほどあり、アセックの里子たち30名を含め約150名の子供が寄宿生活を送っていました。

子供たちを見ると、明らかに支援物資なんだろうと想像ができるような、同じ柄のサイズの合わないシャツを腕まくりして着ており、また支援物資は日本以外にもさまざまな国から届いているようで、韓国のテコンドーの衣装を着ている子供も見られました。

支援物資は分け隔てなく行き渡っているのですが、里親がいる子供の方が定着率が良いためか常に清潔な服を着ているようで、生活に安心しているためか穏やかな顔つきをしていることから、服装や目つきなどを見ると里親が



子供施設「オド」



「オド」のバンガロー内部

いる子供といない子供は一目瞭然でした。

ネルグイ女史曰く、年々収容される子供たちの低年齢化が進み、幼い頃から厳しい生活を強いられているためか目つきの険しい子供が増加している傾向であるということでした。

また、子供たちが夏以外の季節に生活している施設を2カ所訪問する機会があり、私たち3人の中からは大野さんが代表して施設を訪れました。まずは、モンゴル語で「世話をする」という意味のロシア軍の施設を再利用している「ハラムジ」という国営の施設です。子供たちが夏のキャンプ場に移動している期間を利用して改修工事を行っていましたが、資金が足りず工事遅れ気味で夏が終わり子供たちが帰ってくるまでには改修工事が間に合いそうにない様子でした。地上4F、地下1Fのかなり大きな建物で約150名が夏以外の季節に寝起きをしており、アセックの里子たちも大部分はこの施設に収容されているということでした。生活環境という面では、お湯が出ない、暖房が効かないなど、建物は大きくて立派でしたがお世辞にも充実した施設とは言えず、雨風を防ぐだけのものという印象を受けたということでした。



子供施設「ハラムジ」

国営の施設以外には、バチカンが支援するキリスト教系の「パービスト」という施設があり、こちらは国からの支援を全く受けていない民間運営の施設ということでした。先ほど紹介した国営の施設「ハラムジ」より規模は小さく地上4Fの建物で約50名ほどしか収容能力はないものの、生活環境という面では、温水が使える、暖房がある、室内が清潔でベットもきれいであるなど、非常に程度の良い施設であるとの印象

子供施設
「パービスト」



「パービスト」
の部屋

を受けたそうです。全ての子供たちが、このような施設で生活することができれば幸せなのでしょうが、収容能力の問題からアセックの里子たちでも幼児や体の弱い子供を中心に10名ほどがここで生活をしているということでした。

キラキラ輝く瞳の子供たちとの交流

夏のキャンプ場「オド」では、フォークダンスでの交流や野球、サッカー、バスケットボール、フリスビーなどで子供たちと一緒に遊びました。最初は親と一緒に暮らせない、かわいそうな子供たちという思いが頭の中に入り、何をすれば良いのかと悩みましたが、パンテックからのもう一人の参加者である東田くんが、何の屈託もなく本気になって子供たちと遊んでいる姿を見て、一緒にいてあげること、言葉が通じなくても手を握ってあげることだけでもいいんだと思えるようになりました。そんな思いで一緒に遊んでいると、けっして豊かとは言えない生活を送っている子供たちが、本当にすばらしい笑顔でキラキラと輝く瞳で私たちと接していることに気づきました。一生、ここで彼らの世話をすることなんてできないのですから、限られた時間の中でどれだけたくさんの楽しい思い出を彼らにつくってあげられるかということが、今回のツアーで私たちのできる精



キラキラ輝く瞳の子供たちと

一杯のボランティアなんだと思いました。

自分たちと遊んでほしいと寄ってくる元気な子供達を見ていると、彼らにしてあげられることは何か、どういう支援をすれば役立つのかということを考えさせられ、私たちの支援によって大きく成長する姿を見たい、またこの子供たちに会いたいと強く感じました。

パンテツクからの支援物資が活躍

みなさん方から集まった支援物資は、アセックを通じてこれまで3回にわたりモンゴルへ送られており、中古衣料などは施設の子供たちの毎日身につける衣服へ活用されていました。今年の春には、当社の田中社長のご厚意により寄贈された中古パソコン（ノート3台、デスクトップ1台）や什器備品類（机とイス3セット他）がモンゴルへ送付されましたが、これらは



活躍する当社寄贈のパソコン類

里子たちの受け入れを行っている団体の事務所に届き活用されていました。中古パソコンはOSやキーボード設定をモンゴルの仕様に変更を行って使用されており、また、みなさん方からいただいた支援カンパの一部からの補助により、パソコンやFAXが購入されており、こちらも現地の方々から大変喜ばれていました。

みなさんからの支援物資をもとに書籍を購入し贈呈

今回のツアーでは、みなさん方から提供していただいた物品をもとに行ったバザーの売上金の一部を活用して、子供たちへの書籍を現地で購入し贈呈してきました。

ウランバートル市内には日本の街角で見かけるような、いわゆる一般的な本屋さんが見あたらないため、国立の百貨店で本を選ぶことになりました。今回はアメリカドルで400ドル（日



みなさんの支援で生まれた「パンテツク文庫」

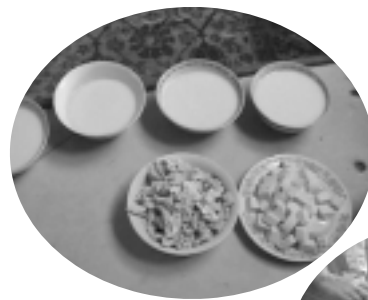
本円で約5万円)を購入資金として持参しており、物価の格差が日本の約1/20程度であるモンゴルの物価を考えると、相当量の書籍が購入できるものと張り切っていましたが、実際には百科事典が25~30ドル、英語とモンゴル語の辞書が15~20ドル、絵本は1~2ドル程度であり、思った以上に書籍類の価格が高いことに驚きました。その反面、高価であるということは、子供たちが簡単には手にすることができないことを意味しており、これらの本を受け取った子供たちがいつまでも大切に使うと期待しています。

社会主義国家から民主主義に体制が変わったとはいえ、書店に並ぶ書籍類にはまだまだロシア語のものも多く見られ、旧ソビエト連邦時代からの影響力の大きさに驚かされました。

今回は子供たちの勉強を支援するという意味で、百科事典、日本語や英語のテキストなどを中心に、合計161点の書籍を購入することができました。今回贈呈した本がきっかけで、子供たちが日本や外国にも興味を持ち、その中から一人でも勉強を続ける子供が現れ、将来、日本とモンゴルを結ぶ架け橋になれるように成長してくれればと願うところです。

体調を崩すひと、太るひと ~モンゴル料理~

モンゴル料理といえば羊肉です。肉団子スープ、ボウズと呼ばれる羊肉が入った肉まんじゅうなど、いたるところに羊肉が使われています。しかし、たいていの日本人にはくさみというかその臭いが受け入れられないと思います。私もその一人で今回のツアーでは食事に苦労しました。また、バター、生チーズ、乾燥チーズなどの乳製品もどうしてもものを通らない食品でした。一度、移動の途中にバスを止めて遊牧民のゲルを突然に訪問したのですが、とても大歓迎を受け、乳製品が山盛りでできました。おそろおそろ口に入れたのですが、口に入れた瞬間にゲルの中にいた数人が表まで走り出て二度とゲ



ビタミンたっぷり
乳製品

大ガメに入った馬乳酒



羊肉の肉まん
「ボウズ」



揚げパン
「ホーショー」



ルの中には帰ってきませんでした。もちろん私もそのひとりであり、馬乳酒も出していただいたのですが、どうしても口に運ぶことができませんでした。でもそんなモンゴルの料理も口にあう方がいるようで、東田くんのように高熱を出して体調を崩した人もいれば、太って帰国した人もあり、モンゴル料理の奥深さを感じた次第です。

列車で10時間、シベリヤ鉄道で東ゴビへ

今回のツアーでは、モンゴル南端に位置する県のひとつであるドルノゴビ県までシベリア鉄道で10時間の旅を経験しました。私たちが乗った列車はドルノゴビのサンシャイド駅が終着でしたが、線路は果てしなく続きそのまま南下すれば北京までたどり着くそうです。ちなみにウランバートルから北京までの所要時間は40時間かかるそうで、何と大陸らしい壮大なスケールなのだろうかと驚きました。

列車は4人掛けのコンパートメントなので

が、同じツアーの仲間とはいえ、ほんの数日前に出会った赤の他人同士が10時間も同じ部屋の中に居て、いったいどうやって過ごせばよいのか最初はとまどいました。外の景色を見ようにもあいにくの雨模様であり、もっとも晴天であっても窓の外から見える風景は果てしなく草原が広がっているだけで、考え事をするには最適かもしれませんが、少々変化に乏しい景色であり、眠ろうにも昼の移動で時差もないのですから。ところが、いざ10時間の旅が始まると、いろんな人がそれぞれのコンパートメントに出入りし、支援活動を続けている方のモンゴルへの思いや年輩の方が語る人生観など、さまざまな話を聞き意見を交わすことができ、他では体験できないような密度の濃い時間を過ごすことができましたように思います。

また、予想もしない現地の方との交流もありました。今回のツアーには国費で神戸大学に留学している青年が、通訳のボランティアとしてツアーに参加していたのですが、たまたま彼の両親の故郷がこれから向かうサンシャイドだったため列車の沿線にたくさんの親戚が住んでいました。モンゴルの民族衣装であるデールを着ていた彼のおじさんは、初めて日本人を見ると言いながら丁寧に挨拶し握手をしてくれました。そしておじいさんの代から使っているという嗅ぎたばこの入れ物を手にとらせて見せてくれ、嗅ぎたばこの楽しみ方を教えてくれました。別の親戚のおばさんは遠い国から外国人を連れてきた甥のために、家庭料理を鍋一杯に差し入

れてくれました。岩塩だけで味付けしているにも関わらずほんのりと甘い牛肉とジャガイモの煮物、「ホーショー」と呼ばれる羊肉のミンチでできた餡を包んだ揚げパン、全く臭みのないラクダの乳入りミルクティーなど、どの料理もこのツアーを通じて口にしたモンゴル料理の中で最も美味しく心に残る味わいでした。

人の手が入っていない東ゴビの自然

ドルノゴビの「ドルノ」は「東」という意味で「ゴビ」は「砂漠」という意味なので、直訳すると「東の砂漠」という意味になります。この町に団体観光客？として訪れた日本人は私たちが初めてとのことで、私たち一行はあたたかい歓迎を受けました。

ドルノゴビ県は人口約5万人でその内6割が遊牧している地方都市です。主な産業は牧畜で、全体で約100万頭の家畜を飼育していますが、今年は雪害の被害により県北部を中心に13万頭の家畜が死亡しました。その際、日本や各国から支援物資が届き、現在は県として家畜を与える取り組みを展開しているということでした。県南部はゴビ地域（砂漠地域）となっており、砂漠の緑化運動にも取り組むとともに、全く人の手が入っていない自然を目玉に観光開発を進めているということでした。

このツアーの宿泊は基本的にゲルが中心だったのですが、ここドルノゴビでは、360度見渡す限り何もない砂漠の中にぼつんとあるツーリスト用のゲルに宿泊しました。ここはこぼれ落ちるような満天の星空が自慢の場所だけに、滞在中ずっと見るができなかった星空を目に焼き付けて帰ろうと思っていたのですが、この日の夜もあいにくの雨模様で、モンゴルを訪れてから星空を見ることができたのは、結局、最初の夜だけとなってしまいました。

ドルノゴビは化石の宝庫でもあります。満天の星を隠してしまった昨日の憎らしい雨のおかげで、翌日は砂が洗い流されて、そこら中で石

シベリヤ鉄道
「薪の湯沸かし器」



列車内でくつろぐ



にわか考古学者誕生、化石の発見



砂丘の中でのホーミー鑑賞

ころを拾うような感覚で化石がゴロゴロと転がっています。見事な形をした恐竜の背骨、丸太のまま石になった木の化石など、実際に手にとって触れることができたことは良い思い出になりました。

また少し場所を移した砂丘では、民族衣装を身につけた演奏家が馬頭琴の演奏とホーミーを聞かせてくれました。このツアーでは、それぞれの歓迎式典で民族舞踊や民族音楽の演奏が行われましたが、野外でそれも砂丘の真ん中で聴く馬頭琴とホーミーは初めてであり、一生心に残る体験となりました。

ドルノゴビでは子供たちとの交流もありました。私たちが宿泊したツーリストゲルには、ゲルで働いている大人のお供として10歳ぐらいの子供たちがお手伝いしていました。彼らにとって日本人、いや外国人そのものが珍しい存在であり、どこに行くにも面白がって私たちについてきました。言葉は通じなくても、お互いに興味を持てばそれなりにコミュニケーションはとれるもので、彼らと私たちとの合い言葉は「ミニーエージ」というモンゴルの有名な歌でした。「ミニー」は「私の」という意味であり、「エージ」は「お母さん」という意味で、「私のお母さん」という歌です。これは日本人も一緒に歌うことができる歌として、このツアーの間ずっ

と練習していた歌で、子供たちと一緒にたどたどしいモンゴル語で「ミニーエージ」大合唱しているうちに、いつの間にかすっかり仲良くなっていました。わずか1泊2日の滞在でしたが、別れるときには寂しい気持ちになりました。

最後に

今回のツアーを通じて一番に感じたことは、ボランティアツアーとは言っているものの、ボランティアをするのではなく反対にボランティアされているというか、参加している私たちの方が、キラキラと輝く瞳を持つ里子たちから、そしてモンゴルの大自然から多くのものを得ているような気がしました。

また、私たちが行っている支援活動の実態を見ることができたことも、私にとって大きな収穫でした。私たちの活動や支援物資が活用されている姿を見て、これまで続けてきたことは無駄ではなかったのだと感ずることができたからです。

これからの支援のあり方については、支援を必要としているニーズをよく把握した上で、支援する側の自己満足にならないように心がける必要があり、何をどんな形で支援することが最も効率的なのかということも考えて行く必要があると思います。

モンゴルへの取り組みについては、引き続き、息の長い活動として続ける必要があり、私自身関わっていきたいと感じ日本に帰ってきました。今回、パンテックユニオンの代表としてモンゴルを訪問し、さまざまな体験を通して非常に良い経験ができたと感じています。みなさんありがとうございました。

以上

(文責：大野公一)